の分類でIまたはII型であった．術後最長3ヶ月までCEA値の変動を追跡したところ，切除不能例は高値のままであったが，主腫瘍を切除不能例は高値のままであったが，主腫瘍を切除できたものでは術後陰性となった．

25. LPSのRIA測定における問題点

田井　千秋
（岡山大・1外）

私共は1972年以来エンドトキシンのradioimmunoassay法の確立を心掛けてきた．合成ペプタイドホルモンと異なり，未だ純品として抽出できていない上，構造と機能の結びつきも定かでないこのような物質の測定のためradioimmunoassayを応用する折，抗原抗体両面にわたる多様性が問題となることは当然である．また類縁物質との共通反応性，自然抗体による測定値の修飾など様々の難かしい問題が内包されている．こういった問題に対する今日までの私共の検討した結果を紹介しつつ，現在臨床検体（血清）のエンドトキシン測定に供しているLPS RIA Kit (Type II) の信頼性と精度を中心に，従来のRIA法や，Limulus Testと対比しつつその有効性や，長所，短所について論じた．

26. 硫安法，ポリエチレングリコール法，ミリポアフィルター法等による2本鎖ならびに1本鎖DNA抗体の測定

更井　哲夫　　宮脇　昌二
大藤　　真
（岡山大・3内）

自己免疫疾患，特に全身性エリテマトーデス(SLE)には急性期に特異的に高抗体価で，2本鎖DNA (n-DNA) 抗体が検出され，臨床経過とも良い相関を示していることからSLE診断，臨床経過観察上極めて有用である．一方1本鎖DNA (d-DNA) 抗体はSLE急性期のみならず，寛解期にも高抗体価で検出され，他の疾患群にも低抗体価ながら認められている．今回n-DNA抗体価は硫安法，Solid-phase法，を^{3}H・Actinomycin D結合n-DNAを抗原として測定，また^{14}C-EColi DNAを抗原としたMillipore Filter Assayの3法で測定し，^{3}H・Actinomycin D・n-DNAを抗原とした硫安法が優れる結果を得た．またd-DNA抗体価測定は^{3}H・Actinomycin D・d-DNAを抗原として硫安法，Solid-phase法，8.5% PEG法（第24回日本アレルギー学会に発表）の3法で比較し，感度・特異性・再現性・定量的表現等により検討したところ，PEG法がα-gl量等に左右され易い問題はあるものの，優れた方法である結果を得た．

Presented by Medical*Online